FM 医療概論を一年間受講して

グループ D

1. 授業前の知識

生命科学研究科において私は、分子科学情報分野という生物化学（ケミカルバイオロジー）を専門とする研究室に所属し研究・勉強をしている。生物や有機化学の両方をこれまで勉強してきたので、医療概論開始前の私はゲノム関連や代謝経路及び身体に内在する化合物・酵素についての知識はある程度持っている状態であった。さらに自分自身の研究が細菌と抗生物質についての内容なので、感染症に関する知識についてはそれなりに勉強してきた状態だった。

2. 授業の目的

未来型医療卓越大学院プログラムには、未来の医療の在り方の裾野を広げるべく他分野から、つまり我々のような医学を専門としない学生が多く在籍しているが、やはり医学に関する知識を最低限身に付けないと未来型医療に対して有用な人材は育たないことは確実である。逆に、医学部出身のプログラム生は、進んでこれまでに自己研鑽してこなかった限り知識は現在の医療の常識へとどうしても偏りがちになり、この状態では他の分野の生徒や講師・教員との学問的コミュニケーションが図りにくくなる。そこで、未来型医療を想像するにあたり全分野の学生にとってある程度共通項として持っていくべき知識を、全学生が最初に学んでおく必要があり、このことが本プログラムの **FM** 医療概論の授業目的であり、このことを頭に入れ今年の授業を受けてきた。

3. 到達目標

本プログラムを通じて未来型医療をプログラム生が創造していくためには、各分野の専門家やプログラム生間でのコミュニケーション（または共同研究）によって新しい視点・概念・方法を獲得していくことが必要となる。そのための基礎となる知識（2.で述べたような知識）を習得し、ファシリテーター教員や講師によって機会を作ってもらい誘導を受けなくても、プログラム生たちが自らの知識や技能を活かし、それを共有することができるように成長することが、**FM** 医療概論の到達目標である。

4. 研究への応用・活かせる点

今後の研究において、自分たちに研究がどのように社会へ還元されていくのかを改めて考える良い機会となった。授業では、先生方が専門知識のない我々にも伝わるように工夫して説明してくれたので、幅広い知識を得ることができた。たとえば、これまで私は「感染症は抗生物質で治るもの」以外のことは考えずに研究活動を行ってきたが、院内感染防止も含め様々な職種の人たちの仕事や、少しでも痛みを和らげるような麻酔等の使い方（山内教授の授業は大いに印象に残りました）など、オペや薬剤投与においては常に最新の科学的アプローチが為されていることを知った。より抗菌活性が高い化合物をつくれればよいのではなく、投与方法の簡便さや、患者に実際投与してから完治までのプロセスがより患者・医

療従事者の両サイドから見て簡便で効果的であることが大切なのだと肝に銘じ、これからは研究を行っていきたいと思う。また、理系の分野だけでなく、たとえば経済学の吉田先生の授業からも、医療と経済は密接に関わっており、我々のような製薬化学を行っている研究室のメンバーも、授業で学んだようなことを頭に入れて研究を行うこと必要があると感じた。

個人的に最も印象に残り、今後の研究人生において役に立つと感じた授業は、糖尿病に関する授業の回だった。内容の基礎的な部分としては生命科学をこれまで学んできたこともあり、もともと知っていることも多かったが、先生の授業展開は「どこに研究の着眼点を置くか」「メインの研究結果から得られるデータを別の視点から見るときのどのようにみるか」など、「最先端の研究テーマをみつけそれに対しどうアプローチするか」というこれから私自身が研究者として成長していくときに最も知りたいことを学ぶことができた。先生自信の研究人生を例にとって説明してくれたこと、しかも医学部の先生の話ではあったがどの分野の研究においても当てはまる内容だったところが特に役に立った。

5. 影響を受けたこと

これまで、メカニック分野の工学は私の研究には関係ないので、特に進んで知識を得ようとしてこなかった。しかし、どの範囲まで薬剤の効果で治り、どの範囲がリハビリや心理療法で治り、そして治らない症状も義手義足をはじめとした運動の補助器具でどの範囲までカバーできるかを、各分野の専門家が他分野の最新研究を知っておくことで、治療においてより多重的有効な治療法が確立されていくのではないかと、この一年 FM 医療概論を受講してきて考えるようになった。

6. 来年以降の改善点・授業の限界

やはり、専門領域に近い授業の内容は、ある程度その場の授業速度が多少早くても内容が知識として記憶に定着するが、そうでない分野の授業は、こちら側の基礎が無いためなかなか一回の授業で頭に定着できる内容は限られてくる。出席を ISTU 受講で可能かどうかは先生に任せるとしても、できれば全授業 ISTU に録画をアップしていただく、もしくは未発表内容が含まれて先生側が好まないのであれば、そこだけ省いたスライドでもいいので、復習のしやすい環境があると、より他分野の知識を蓄え将来的な研究成果の社会実装を考えるに役立つ効果的な授業となると考えられる。

7. まとめ

大学院生が自分の研究分野とは全く異なる領域の知識を身に付けるための機会は、通常ほとんどない。そういう意味において、FM 医療概論は非常に貴重な機会であった。広い知識は、未来型医療への研究成果の実装を考える際必ず必要なものだと、私だけでなく全プログラム生が感じたはずであろう。